

対人援助職の「ホムンクルス」

—心理臨床家が心理療法を受けておくことについて—

藤 森 旭 人

本論では対人援助職に内包される援助者のこころの在りようを出発点とし、心理療法の中でも無意識を扱う精神分析において、心理療法家が個人分析と呼ばれる精神分析を受けておく意義や必要性について考察した。その理解を促進させるために漫画「ホムンクルス」を用いた。「ホムンクルス」とは「こころの歪み」であり、主人公が他者の「ホムンクルス」を視覚化して見るができるという設定になっている。この歪みは精神分析的作業の中では転移—逆転移として捉えられるものであり、他者の「ホムンクルス」と関わることで、精神的破綻をきたすまでが描かれている。対人援助者は、自分の傷つきを棚上げし、他者への援助によって自分自身を保とうとする傾向があることにも触れ、この傷つきや破綻を防ぐためにも、個人分析を受けておくことの必要性について論じた。そして、それは他者のことをよく考えられるこころの状態を作りだしておく作業でもあることを強調した。

キーワード：対人援助職、個人分析、転移—逆転移、レスキューファンタジー、Wounded Healer

This study started thinking of a psychological state for human service providers, and discussed the need of personal analysis for being a professional psychotherapist. In this article, I quoted a story comic 'Homunculus', which means 'a distortion of one's psychological state' for considering about transference-counter transference. Also I pointed out that some human service providers have "rescue phantasy" so that they can "help" others without thinking about their own wounds. I concluded that for being a professional human service provider, especially for being a psychotherapist, the personal analysis is essential for thinking and/or containing others.

Key words : human service providers, personal analysis, transference-counter transference, rescue phantasy¹⁾, Wounded Healer,

1. はじめに

人間はなぜ対人援助職に興味を持つのかを本論の出発点とし、特に「こころの専門家」である臨床心理士が、心理療法を受けておくことの意義について考察したい。心理療法の中でも無意識を扱う精神分析では、その訓練過程において、自分自身が心理療法を受けておくことを個人分析、教育分析、あるいは訓練分析と呼び、必要条件とされている（以下個人分析とするが、その理由はのちほど記述する）。

「白か黒か。グレーがあってもいいじゃないか」。個人分析に関する想いの発露は、筆者が大学院修士課程に入学後初めての学会で目にするようになった、このようなやりとりの中にあつたように思う。いわゆる転移—逆転移の議論であり、どこまでがクライアント（以下 Cl）からの感情の投影物で、Clからの転移の結果生じたセラピスト（以下 Th）の逆転移なのか、あるいはどこからがThの病理的な部分が活性化された結果の「病的な」逆転移なのかの境に関する問題についての議論であつた。その答えは分析を受けることにより導かれるという短絡的な解答を用意する前に、もしくは

は、二者の生成物である「グレー」と言う「間主観性 (inter-subjectivity)」(Stolorow, et al, 1987) にむやみに飛びつく前に、今一度、転移—逆転移あるいは投影同一化について吟味し、それでも個人分析が自分自身にもたらす影響は計り知れないものがあるのかを考えてみたいという気持ちが、本論を書こうと思った動機である。

それを考える素材の1つとして、山本英夫の「ホムンクルス」という漫画を用いる。ここで言われている「ホムンクルス」とは、「こころの歪み」という意味であり、逆転移について考える恰好の素材だと感じられたからである。この漫画を通じて個人分析を受けることへの想いをめぐらせ、対人援助職の本質に迫りたい。

2. 個人分析？教育分析？訓練分析？

冒頭から「個人分析」という言葉を用いてきたが、Th自身が分析を受けることは「教育分析」や「訓練分析」という呼び方もされている。筆者があえて「個人分析」というタームを用いるのは「病理のない人間はいない」(平井, 2005) という考えに基づく。むしろ「こころ」や「心理学」に関心を持つ人ほど、そこに問えを感じているのではないかとさえ思うからである。それはあたかも鼻が詰まって苦しい時に、ようやく鼻で呼吸をしていたのだと分かることと同じように。そもそも対人援助職に興味を抱く人はどこかで助けを求めている、あるいは助けられた経験から今度は自分が誰かを助けたいといった前提があるように思われる。

とはいえ、日本の心理臨床の領域において個人分析が普及しているとは言い難い現状がある。国際精神分析協会は週4回以上の分析を「精神分析」、それ以下の頻度を「精神分析的心理療法」として区別している。そして前者をThが受けるのには、あまりに膨大な時間と莫大な費用がかかる。しかし、それ以上に「患者」というレッテルを貼られることへの抵抗が大きく影を落としているようにも思われる。あるいは、いつも同じ問題がCIとの間で生じる時にようやくTh自身の分析の必要性を微かに感じるといった程度であろうか。松木(2010)

は個人分析への動機づけとして、自分が「変」だと感じる必要ではないかと述べている。そして「自分がどのように変なのか」、「自分がどのように偏っているのか」を熟知することがThには大事で、その機会を提供してくれるのが「精神分析」なのだという。さらに個人分析は、他者のこころに関わる臨床家として、十分に機能する態勢を作る作業であり、それはThのこころの闇や「変なところ」が他者のこころを理解することを妨げたり、他者から搾取することにならないための準備でもある。また、「個人分析を通して自分自身のこころの偏り、闇を見ていく作業そのものが、CIのこころの病理を理解し、そこに働きかけるときの、体験的実感をともなう貴重な指標になり、物差しとして役に立つ」のだという。それは「ひどく苦痛な事実」を知っていく作業でもあるが、その結果「自分が問題のない人間にならなかった」ことを、身をもって体験し、その事実からの苦悩やこころの痛みにもちこたえる力をもたらしてくれるという。要するに他者へのこころの援助を行う上で、Thが「遣い勝手のよい」こころを用意しておくためのものなのであろう。したがって、個人分析への抵抗もしくは価値下げには、この苦痛な体験を回避したいという要因も働いているかもしれない。そして、個人分析が進んでいくと、訓練や経験という建前が消え、もっぱら自分を見つめ考える望ましい方向に進んでいくという。やはり、自分自身が援助を求めていることとのつながりがそこにはあるように思われる。一方で個人分析を訓練や経験であるという考えに固執し、内面を見ることから逃げ続ける人もおり、このような場合には個人分析は役に立たないという。自分の中には「患者」あるいは「要援助者」という部分があることを棚上げしようとしてしまっているということであろう。もう一步踏み込めば、この棚上げが何なのかを考えるきっかけを得られる可能性があるようにも思われるが。

飛谷(2012)は、個人分析を受ける前から感度のよいThが確かにおり、的確なスーパーヴィジョンのもとでなら、十分に精神分析プロセスを始動させ、指導の下でそれを統括することが可能であることを指摘しているが、「周回遅れ」になることも

免れないという。この「周回遅れ」は、飛谷が述べているように、分析体験について知りつつある患者が、分析体験を知らない治療者に出会うことの「ずれ」と同様に、スーパーバイザーという超自我あるいは外からの視線を通じた観察や解釈行為の結果生じるものでもあり、厳密には here and now でない体験を示しているように思われる。前回のスーパーヴィジョンで言われたことに近いような場面や語りに遭遇すると、スーパーバイザーの指摘を援用してしまうような状況である。実は、Cl はもうそれより先に行ってしまったのにも関わらず、Th は前回のセッション状況に留まり、まさに置き去りにされてしまっている状況がそこにはあると言える。Th がこのような状況に置かれてしてしまうと、逆転移の活用力も格段に下がってしまう。さらに飛谷は、精神分析的態度の本質は「逆転移を行動化することなく持ちこたえそれがいったい何を意味するのかについて考えるスタンスを失わないこと」だと言い、「投影を受け取ることができる」ことと「考えることができる」ことであると換言もしている。Cl からの投影物の棘が大きければ大きいほど、それを Th のこころの中に留めて考えることは困難になり、Th は行動化を起し、また Th も傷ついてしまうように思われる。ただ、この「傷つき」に関しては、さらに考察が必要であると思われるので、後述することとする。総じて、松木も飛谷も、個人分析は「必要条件」にすぎないと述べていることから、精神分析(的心理療法)を行っていく上では、その後も不断の自己探求が不可欠になってくるということであろう。個人分析という自分の内面を見つめる機会を得ることを通じて、Th のこころの器が大きくなったり、こころのスペースを作ったりし、考えられる容量を増やすことができるのかもしれないが、それは個人分析を適切に活用できればといったところであろうか。以下では、投影やこころの歪み、偏りについての具体的なイメージ表現である漫画「ホームクルス」を用いて、他者に内面を見てもらうという心理臨床の本質について考察する。

3. 素材『ホームクルス』

3-1 ストーリー

主人公は、新宿西口の一流ホテルとホームレスが溢れる公園の狭間で車中生活を送っている34歳の「名越進」である。その「名越」が車中で胎内の赤子のように身を丸め、指を吸いながら寝るところから物語は始まる。そのような生活の最中、彼は22歳の医学生「伊藤学」に出会う。「伊藤」は、「名越」に報酬70万円で額を通じて頭蓋骨に穴を開ける「トレパネーション」をさせてくれと依頼する。それをすることによって、第六感が芽生えるかどうかを確かめたいのだと言う。疑心暗鬼ながらもそれを引き受けた「名越」は、その手術後少し経てから、右目を隠し左目で他の人間を見ると、異様な形に見えるようになる。「伊藤」は、「他人の深層心理が、現実のようにイメージ化されて見えているのではないか」、「心の深層に沈んだ歪み」ではないかと言い、彼はそのイメージを「ホームクルス」と名付けた。

「名越」はまず、小指を詰めることを生業にしているやくざの「組長」に路上で出会う。「組長」は少年の頃、農作業中に誤って友達の小指を鎌で刈ってしまった体験があり、その友達への罪悪感を抑圧しながら「組長」をやっていた。その罪悪感を薄めるために76人もの小指を詰め、虚勢を張っている姿が「名越」にはロボットに見えたのである。さらにそのロボットの背後には自分の小指を鎌で切ろうとする少年が見えていた。「名越」がその少年に自分を傷つけることはやめるよう語りかけると、少年は涙を流し、結局「組長」は自分の小指を切り、組をやめる決心をする。一方で「名越」にも子ども時代に友達とスケボーで遊んでいた時に押して車に足を轆かせてしまったという同じようなトラウマがあり、共鳴している部分が「ホームクルス」になっている様子も伺える。また、喫茶店にいた「おばさん」は首をやたらと守っているように見え、その背景には、昔男性に首を絞められた経験があるという。しかし、この「おばさん」と「名越」が共鳴する部分は描かれていない。彼はさらに幾ばくかの人との交流を通して、「ホームクルス」が完全に他者の病理を反映しているわ

けではないことに気が始める。そして、彼と直接関わった人間の「ホムンクルス」が彼の身体に移されていく。例えば、「組長」のロボットの足が、「名越」の足に移ってしまうように。

物語の当初は他人の深層心理が「ホムンクルス」となって見えると言っていた「伊藤」であるが、自身の病理が明確になるにつれて、「それは自分自身のこのころの闇を相手に投影したものにすぎない」と言い始める。「結局は自分自身を見ている」のだと。そして「名越」は「伊藤」のこのころの中に1匹のグッピーを見つける。それは「父親」という水槽の中に入ったグッピーであった。「伊藤」の父親は病院を経営しており、彼は裕福な幼少期を送ってきた。彼は幼少期より、女の子のような振る舞いをしており、父親に男らしくなるように強要されてきた。また、「伊藤」が小学生の頃に飼っていたグッピーを父親に殺されていたが、それを完全に忘れてしまっていた。そのグッピーは美の象徴であり、「名越」を通じてそのことに気が始めた「伊藤」は、父親との女性性をめぐる「対決」を経て、「女性」となっていく。

そして、物語が進むにつれ、「ホムンクルス」として見えるものが、完全に相手の「歪み」なのか明確な時と、自分の投影の産物なのか分からない時が入り混じってくる。「名越」は、全身を整形しており、かつての自分の姿形を忘れてしまっており、整形後、手に入れた優雅なサラリーマン生活には、生きている実感が伴っていなかったことが徐々に明らかになってくる。そして、物語の終盤、「名越」は「自分のこのころを見てくれた元彼女」に捕らわれ、必死に彼女の幻影を追い求める。そして最後は、「俺を見てくれ」という思いが顕在化し、周りの人々が皆自分に見え始め、統合失調症圏のように自我境界が脆弱になってしまったところで物語は終わっている。

3-2 なぜ「ホムンクルス」か？

さて、なぜ「ホムンクルス」を素材にしたかである。それは、本漫画が精神分析（的心理療法）における転移—逆転移の概念を分かりやすく視覚化したものと考えられるからである。今日、転移の概念は多岐にわたってきているが、ここでは、主

に内的対象関係の外在化という視点でそれを捉えていきたい。人間は、他人や世界を個々に異なったやり方で見ており、同じ人について、出来事についてでも、人それぞれ、見方、感じ方が異なる。それは、基盤としてこのころの中に内的対象が棲まわっており、その内的対象が様々な関係に影響を及ぼすからであると考えられる。例えば、幼少期に道で転んで擦りむいた時に、「まあ、大丈夫？ケガはない？ビックリしたね」などと、周囲の大人に情緒的に応答してもらえれば、その子の中には困った時には辛い気持ちを受け止めてくれる内的対象が徐々に根付いていくであろうし、感情も少しずつ分化していくと思われる。少し抽象度を上げた言い方をすれば、抱えられずに対象に投げ込んだ感情が、抱えられるものとして、自分に返ってくるということである。この、投げ込まれた感情を変換して返す母親の機能を Bion は a 機能と名づけている。一方、同じような状況の時に、「もう、いつもいつも転んで。うるさい、泣くんじゃない！」などと常に応答されていると、困った時の自分の感情はどうにもならないし、対応してくれないというような内的対象が徐々に形作られていってしまう。同時にその時の痛みは抱えられない感情となって浮遊したままになり、後に問題行動して現れてきたりする。精神分析（的心理療法）のプロセスにおいては、この内的対象の新陳代謝が大きな目的の内のひとつであり、この内的対象を、転移を通じて理解し、よりよい内的対象とのつながりを作り上げるところにその醍醐味があると言える。

「ホムンクルス」に立ち返ってみると、「名越」は相手の内的対象（しかも病的な）が視覚となって現れている。もちろん内的対象の一部であるという制約はあるであろうが。特に、「組長」との関係では、幼少期に傷つき、誰にも抱えられることなく漂っている罪悪に働きかけ、「組長」に「成長」をもたらしている。一方、「おばさん」とは直接関わっていないので、病理が見えるだけで、何も変化は起きていない。また、「名越」と「伊藤」との関係は複雑であるが、全身整形をしたり、女性になりたい気持ちを抑圧して、父親の粹の中にはまろうとしたりしていたところから、おそらく「偽

りの自己」(Winnicott,1965)で共鳴している。「名越」は、「ホムンクルス」を通じて自分と関わった他者が自分を取り戻していくことも手伝ってか、本当の自分を見てほしいという思いが増大してくる。このような思いは、ThとしてCIに関わっている時に、不意に訪れる「自分も理解されたい」あるいは「よいThだと思われたい」という逆転移に似ている気がする。つまり、CIを通じてThは自分自身の病理に気づかされるのである。もちろんこのような思いを治療中に外在化するわけにはいかないので、無意識に追いやられるわけであるが、この感情は一体どこから生じてくるのであろうか。「名越」は、発症のような形で、「元彼女」の額にも「トレパネーション」を施してしまう、いわば「行動化」を起こし、他者の「内的対象」を見る行為自体が破綻してしまう。この逆転移的な破綻を防ぐためにも、精神分析(的心理療法)では、外的構造(時間、場所、料金など)や内的構造(Thのスタンス、つまり、中立性や観察、解釈)を守ることが必須だと言われ、またそれには、多大な時間を費やす訓練が必要なのである。その中核が、「個人分析」なのかもしれない。

では、一体、「名越」は、何を「見ていた」あるいは「見てほしかった」のであろうか。次項では、他者を見ることと、そこに生じる関係性について考えてみたい。

3-3 転移—逆転移と間主観性

ここまでの論で不問にしてきた問いがありつつ「個人分析」について論じてきた感は否めない。つまり、「はじめに」で述べたように「白か黒か」の話が欠落している。「ホムンクルス」の例で言うと投げ込まれたものと「病的」逆転移の判別は可能かということであろうか。端的には「病的」逆転移を減らし、よりCIの理解のために役に立つTh側のところを準備しておくために「個人分析」は必要だということであるが、その境は実に曖昧であるし、Th—CI関係の中で生じてきていることを明瞭に分断できないことも多いように思われる。Freudは、自らが体系化した精神分析において、CIからの転移を十分に受け取るために、Thは「空白のスクリーン」になることを推奨し、逆転移は治療を

妨げる無用の長物をして、排除されるべきものだとしてきた。現在の精神分析の流れでは、多くの学派が逆転移の排除には否定的で、治療的活用が謳われているように思われるが、はたして逆転移はどのように治療の中で活かせるのだろうか。

転移—逆転移をめぐる、Freudの「古典的」な精神分析に真っ向から異議を唱えたStolorowは間主観的アプローチを展開した。それは、精神分析を「2つの主観性(CIのそれとThのそれ)の交差が構成する特定の心理的な場において起こる現象を解明する作業」とし、「2つの主観的世界の相互作用」という関係性に着目している。これは、病理がCIの一方のみに存在するという「古典的」精神分析へのアンチテーゼでもあり、したがって、Thが代われれば必然的に関係性も変化し、治療のプロセスも様々になるというわけである。つまり2人の関係性という文脈を抜きにしては、治療は成立し得ないのである。これは、症状を「悪」として、その駆除を図る医学モデルからのパラダイムシフトであり、より、Thの主観的体験に重きを置いた点で意義深い提唱であると思われるが、未だ着地点が見えてこない。

「名越」に見える他者の「ホムンクルス」も、そこに主体(つまり「名越」と主体(つまり他者)との関係性が生じなければ、「ホムンクルス」はただの虚像にすぎなくなってしまっている。精神分析的作業とは、そこにいる2人が否応なく無意識を通じて「関係付けられ」、そこに起こっていることを考えることであると思われるが、「名越」が他者をただ「見ている」時と、コミットして「見ている」時とでは、体験の質が異なっている。後者の場合は、自分の身にも変化が起きている。つまり、病理が乗り移ってしまっているのである。これは、いわば投影同一化を視覚化したものであり、投げ込まれたものは身体に蓄積されてしまっている。ここに「ミイラ取りがミイラになる」(松木,2006)メカニズムがあるように思われる。これを間主観的体験として捉えるか、投影—逆—同一化と捉えるかは学派や立場によって異なるのであろうが、「間主観性」として捉えた時の治療者側の病理は曖昧なままであり、「ミイラ取りがミイラ」になった状況も棚上げされたままになる可能性もあり、ある

種、治療関係の逃げ道として用いられなくもないように思われる。「関係付けられた」二者について、自分のところを通じて他者を「考えられる」状況を作り出すという文脈においては、自分が「ミイラになってしまった」ことを考えられる余地がここにあるべきなのであろう。

4. 考察

4-1 レスキューファンタジーは克服できるか

前章でミイラ取りを例に挙げてきたが、北山(2006)はこれを「夕鶴問題」として、「自虐的世話役」に関する考察を行っている。「夕鶴問題」というネーミングは「鶴の恩返し」において、動物が正体を隠して嫁に来たが、その傷ついた正体が露呈して去るという物語から援用されている。このパーソナリティは「自らを傷つけてまで他者に奉仕しようとする人々の生き方を指し、人の面倒見がよく、自分の面倒を見ないし自虐性がある」という特徴を示唆しており、冒頭で述べたような対人援助職を望む者の背景に隠された問題として読み取ることができるように思われる。また、それは「他者を助けたい」、「助けられるのは自分だけだ」という、いわゆる「レスキューファンタジー」の換言であるといってもいいだろう。第2章でも書いたように、転移の中でThの傷つきが露呈した時、「もうこれ以上関われない」、「見るができない」と感じられ、行動化を起こしてしまうことはCIからの投影物の棘が大きければ大きいほど不可避なものであるように思われるが、そこに、潜在的にはあるかもしれないが、自分の問題に触れさせられるという体験が伴っていることはないのだろうか。そもそも「鶴」がきれいな女性としてやってきた理由は「助けられたから」であり、ひいては「助けられたい」思いがそこにはあり、「助けられた」から「助ける」方へ回るといふ流れであろう。しかし、「助けられた」がゆえに、また自虐的に身を削り、それが露呈すると去っていくという、結果的には「助けられていない」話であるように思われる。去っていく鶴は「行動化」してしまったThそのものであり、治療関係の破綻を意味している。

そこで、北山は「生き残る」、「発病しかけるが

(自らの病理を)抱える」というTh側の態度を浮かび上がらせ、治療論として展開している。ここに、ユング派で言われるような「Wounded Healer」(傷ついた治療者)の概念との結びつきが見られるわけであるが、「傷ついてこそ治療が可能」であるという言説が妥当なのかという問いがさらに浮上してくることになる。そして、この傷つきをTh自身が抱えてもらう体験が背後に必要なのか、少し紆余曲折を経ることになると思われるが、「Wounded Healer」について、次項で検討することとする。

4-2 Wounded Healer は幻影か

ここではWounded Healerについて検討していくわけであるが、沖縄や奄美大島の中に、文化としてその位置を確立している存在として「ユタ」がいる。彼女らは、Wounded Healerとして一定程度世間にも知られているように思われる。つまり、彼女らは、ユタになるプロセスとして「カミダリィ」と呼ばれるある種の危機体験を経ていることが多く、何らかの傷つきからそのような存在になっていると言われる。それは近親者の死や原因不明の心身の不調、災害にたびたび見舞われることだという。そして、そこから逃れようとすればするほど苦しさは増幅し、その運命を引き受けることで、「ユタ」への道が開かれるという。そして、そのプロセスにおける不幸は「超越的なもの(主に神と称されるもの)」からのメッセージであると捉える。その後は、「目に見えないもの」との対話やお告げを通じて「人助け」(西村,2007)と彼女たちが呼ぶような「援助」を相談者に行うのだという。

改めて、「治療者の傷つき」とは一体何なのであろうか。そして、この傷つきは自己満足ではなく、本当に心理療法に活かすことはできるのであろうか。「ユタ」は危機体験を前提としているわけであるが、それを「引き受ける」作業がその過程に介在している。精神分析家は決して運命論者ではないので「運命」という語は用いないと思うが、山本(2003)は、精神分析的な心理療法が目指すところはCIが「人生の主として生きることであり、真摯に人生へと投企することを援助するもの」と述べており、CIが自身の「人生の主」を「引き受ける」ための援助的作業だと考えられる。逆もまた

然りではなかろうか。つまり、自分自身の人生に投企していないThもまた、自虐の世話役の域を出ないであろう。この自己投企を支えるものは、これまで見てきたとおり、「個人分析」ということになるように思われる。

しかし、「個人分析」を受けたから自身の「人生の主」になれるというのは早計であろう。精神分析の中核概念として存在するエディプスコンプレックスの基となったエディプスの神話の中では、エディプスが自分の妻が自分の母親であることを知った時、自身の目を突いて失明させたことから分かるように「見たくない」、「知りたくない」ことを知っていく作業には大変な苦痛を伴う。そして「個人分析」にも、先の松木(2010)の引用からも分かるようにその苦痛が伴うはずである。「危機体験」、「苦痛を抱えられること」、「人生の主」を「引き受ける」ことが、Wounded healerの本質ではないだろうか。ただ傷ついていればいいというものではないことは明白である。この傷つきを「抱えられた」体験が、CIと会っている時にも有効に働くのであろう。北山(2007)は、精神分析において「過去の親子関係や内的対象関係が台本となって治療関係に持ち込まれるという転移現象を展開しながらも、その転移を観察し分析し考える」ことを支えるのは、CI関係に三項関係を築き上げることだという。それは、直にケースに関わる方法としてはスーパーヴィジョンがあるし、さらに個人分析を受けることも欠かせないという。これは、Casement(1973)が「心の中のスーパーバイザー」を置いておく必要性を訴えたこととも軌を一にする。結果、心理療法の中で、Thは転移を引き受ける「出演者」の部分と一歩引いたところから離れて「観察者」になる、双方を担えることが望ましいのであろう。

4-3 対人援助職とこころの健康

最後に、「ミイラ取りがミイラに」ならないためにも、対人援助職のこころの健康について考察したい。月並みな表現をすれば、対人援助職はそれなりの心的ストレスがかかる職業である。教育然り、保育然り、介護然り、心理然りであろう。そして、対人援助職に就くにあたっては様々な訓練

を要する。保育士で言えば、乳幼児の心身発達や関わり方に関する知識や技能、指導案の作成方法、現場実習などがあり、それらはすべてよりよい保育を提供するためにある。そのような訓練期間中、そして実践をする段階で、どう自分自身の健康を保っていけばよいのだろうか。

まず、訓練過程に枠組みがきちんとあり、その専門職の立場が守られている必要があるだろう。枠組みのない中で実践ほど危険な状況はないように思われる。しかし、はたして我が国の心理療法の訓練はどの程度体系化されていると言えるのだろうか。未だ国家資格でない臨床心理士には様々な学派があり、資格取得前段階の大学院教育では、基本的な知識や臨床的態度の取得に重きが置かれ、その後はそれぞれのオリエンテーションに任されている。特にその専門的知識や技法の習得に時間がかかると言われている精神分析の世界では、長期にわたる訓練が必要である。英国にはKlein派精神分析のメッカであるタビストッククリニックがあり、そこでは前臨床段階の乳幼児観察コースで2～5年、その後の臨床コースで4～7年の臨床トレーニングを受けてようやく精神分析家の資格取得に至るようになってきている。その過程で「精神分析はこりこり」と、離れていく訓練性も多いと聞く。日常が精神分析漬けになる体験を通じて、各々がそれぞれの「答え」を見つけていくのだろう。それは、スポーツや芸術を職業とする専門家により近い立場と言えるかもしれない。何年単位で取り組んで見えてくるものこそがその本質であり、例えば、「感性を磨く」ために、絵画などの芸術を一過的に鑑賞することなどは一線を画すように思われる。そして、その訓練過程では、自身の健康も脅かされてくることがあるようである。観察、臨床、文献購読と、日々の課題は山積しており、そこに抱えられる体験が必要になってくるのではないだろうか。その一端が個人分析であり、自分自身のこころに光が当たる時間、体験だと思われる。「ミイラにならないミイラ取り」や「去っていかない夕鶴」になるためにも、自分自身と向き合う時間、つまり自分自身の「ホームクルス」を見つめてもらうことを通じて、自分自身を知っていく時間は、Thとして機能する背景に極めて必要なもの

なのかもしれない。また、「ホムンクルス」の「名越」は物語の初めから車中で指を吸いながら赤子の様に寝ており、何らかの傷つきを抱えている様子が伺える。しかし、この傷つきは一旦留保され、他者の「ホムンクルス」を通じて徐々に顕在化することになってくるが、そこに、彼の傷つきを見てくれる内的対象は脆弱な対象としての「元彼女」しかない。そして、「粹」のないまま他者の「ホムンクルス」と関係が続けた結果、精神的破綻をきたして終わっている。精神分析的な作業を続けていく上で、このような破綻を防ぐためにも、自分のことを「見て」くれる、「考えて」くれる確固たる内的対象がThの中に必要になってくるのかもしれない。それは個人分析を受けることで得られる中核的な体験のように思われる。

5. おわりに

英国で精神分析の訓練を受けたある先生からこんな話を伺った。曰く、『英国で寿司を食べようとして入ったお店のそれが、とても食べられたものではなかった。板前さんの様子を見ると、どうやら中国人らしい。彼が尋ねてくる。「アンタ日本人だろう、寿司は好き？」と。さらに続け「僕は日本の寿司を食べたことがないんだよ、いつか本当のすしを食べてみたいなあ、美味いだろうね』。

英国の料理が日本人の口に合いにくいとは古くから言われている体験談であるが、そのような前提も含め、精神分析の状況と照合しても、実によくできたメタファーだと思う。日本の寿司を食べたことがない板前が提供する寿司と、精神分析（的心理療法）を受けたことのないThが行うそれを、はたして本質的な創造物と見なしていいのかという問いである。とても興味深い問いだったので、心理学を学び始めたばかりの大学生たちに、そのことについてどう思うか聞いてみると「やっぱり、それって寿司もどき」という答えが返ってきた。何だか筆者も身につまされる思いがした。日々の臨床が「心理療法もどき」であるのかと。寿司（心理療法）の形態をしていれば寿司（心理療法）と呼んでいいのか、という問いは依然残されたままであり、本場の寿司を習ったことがない料理人で

も、それなりの寿司を作れる人はいるように思う。心理療法も然りだろう。しかし、臨床心理士が対人援助の「専門職」を謳っている以上、それなりの訓練、寿司の比喩で言えば修行が必要であろう。スーパーヴィジョンや乳児観察、文献研究、そして、日々の臨床実践から得られることも大きいですが、それにも増して、自分自身が分析を受けるという体験は何にも変え難いもののような気がしてきた今日この頃である。筆者自身が個人分析を受けるためのプロローグという位置付けをもって本論を閉じたい。

注

- 1) 通常では Fantasy と記すが、特に英国精神分析学派の Klein 派では無意識的空想を Phantasy と表記するため、ここでは Phantasy とした。

参考文献

- Casement (1973): The Supervisory Viewpoint. In W.F.Finn (ed.) Family Therapy in social work: Conference Papers, Welfare Association, London.
- 平井正三 (2005): 心理臨床における個人分析の意義. 臨床心理学 5 (5), 605-612
- 北山修 (2006): 「夕鶴」問題―世話する側の健康, 傷つき, そして死. 臨床心理学 6 (5), 577-583
- 北山修 (2007): 劇的な精神分析入門. みすず書房
- 松木邦裕 (2006): 思わしくない仕事でのこころの健康―フロイトに学ぶ. 臨床心理学 6 (5), 584-589
- 松木邦裕 (2010): 精神分析臨床家の流儀. 金剛出版
- 西村仁美 (2007): ユタの黄金言葉. 東邦出版
- Stolorow, R., Brandchaft, B., Atwood, G.E. (1987): Psychoanalytic treatment: An inter subjective approach. The Analytic Press, Hillsdale, N.J. 丸田俊彦 (訳) (1995): 間主観的アプローチ: コフォートの自己心理学を超えて. 岩崎学術出版社
- 飛谷渉 (2012): 週1回設定の心理療法を精神分析的に行うための必要条件―週複数回頻度の精神分析的心理療法実践の立場から―. 精神分析研究 56 (1), 39-46
- Winnicott, D.W. (1965): The Maturation Process and the Facilitating Environment. Hogarth Press, London. 牛島定信 (訳) (1977): 情緒発達 of 精神分析理論. 岩崎学術出版社
- 山本英夫 (2003~2012): ホムンクルス 1~16 巻. 小学館
- 山本昌輝 (2003): 負の仕事. 齋藤純正・林信弘 編 教育人間学の挑戦 p227-252. 高学出版